

青森市埋蔵文化財発掘調査報告書 第31集

市内遺跡

詳細分布調査報告書

平成8年度

青森市教育委員会

序

私たちの住む青森市には、豊かな自然のなかで培われてきた貴重な文化遺産が数多く所在しており、日本を代表する巨大集落跡である三内丸山遺跡や、縄文人の精神生活に迫ることのできるストーンサークルを主体とする小牧野遺跡などもそのひとつであります。

先人たちが私たちに残した多数の貴重な文化遺産が所在する青森市ですが、一方、豊かで住みよいまちづくりをめざした地域開発や道路建設等の開発事業も市内のいたるところで行われております。

それら各種開発事業との円滑な調整を図りながら遺跡の保護をすすめるために、青森市教育委員会では、国と県の補助金の交付を受けて平成4年度から市内遺跡詳細分布調査を実施してきております。

本書は、平成8年度に実施した調査結果をまとめたものであり、本市における埋蔵文化財の保護に資することができれば幸いです。

最後になりましたが、本書を刊行するにあたり文化庁・県教育庁文化課をはじめとした関係各機関、関係各位に村し、深く感謝の意を表する次第であります。

平成9年3月

青森市教育委員会

教育長 池 田 敬

例 言

1. 本書は、国庫補助金の交付を受けて平成8年度に実施した青森市内遺跡詳細分布調査事業の報告書である。

2. 本文中の遺跡の位置図には、国土地理院発行の2万5千分の1の地図を利用し、上辺を北に統一して掲載した。なお、範囲に関しては地中にあるという特異性により、あくまでも目安であり確定的なものではない。

3. 周知の遺跡に関しては、概ね現況・範囲の変化は見られなかったため本書に掲載した遺跡は、新規登録遺跡と第 章で分析対象とした遺跡にとどめた。

4. 第 章第1節については、青森県教育センター指導主事 工藤一彌氏から玉稿を賜った。

5. 第 章第2節については、次の方々のご助言・ご協力を賜った。

青森地方気象台 技術課長 島村千里 予報官 松原和正

6. 分布調査において表面採集した資料は、青森市教育委員会が保管している。

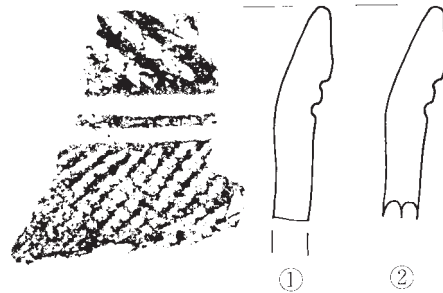
7. 本書の作成にあたり、次の方々にご指導を賜った。ここに深く感謝の意を表する次第である。

(敬称略)

水田政雄 徳差義男 金山晃道

凡 例

土器断面の実測図において、粘土紐の継ぎ目の割れ口を判断できる場合は の様に、判断困難な場合または、粘土紐の継ぎ目によらない割れ口は の様に表現した。



目 次

序
例 言
目 次

第 章 事業実施の概要

第1節 調査目的 1
第2節 調査要項 1

第 章 調査概要

第1節 調査地区 3
第2節 新規登録遺跡 4
表面採集資料 7

第 章 八甲田火山性台地上の遺跡について

第1節 遺跡付近の地形・地質 9
第2節 八甲田火山性大地上の遺跡について 13

まとめ 26

報告書抄録

第 章 事業実施の概要

第1節 調査目的

近年、多種多様な大規模開発事業が増加しており、それに伴い夥しい数の埋蔵文化財包蔵地が破壊・消滅の危機に瀕している。開発事業と埋蔵文化財保護の両者を円滑に調整していくためには、管内に所在する埋蔵文化財包蔵地に関する資料の充実に努めなければならない。

以上の点を踏まえ、埋蔵文化財保護行政を推進していくうえで最も基本的なことは、市内に所在する周知の遺跡の現状把握と新規遺跡の登録等の詳細な基礎資料を整備しておくことであり、この事業を標記の事業名称で国庫補助金の交付を受け実施したものである。

第2節 調査要項

1. 対象地区

市内全域

2. 事業期間

平成8年5月1日～平成9年3月31日

3. 調査主体者

青森市教育委員会

4. 調査体制

調査員 工 藤 一 彌（青森県教育センター指導主事）

調査事務局

青森市教育委員会

教 育 長 池 田 敬

生涯学習部長 永 井 勇 司

社会教育課長 山 田 章

埋蔵文化財策室長 遠 藤 正 夫

室 長 補 佐 福 士 敦

埋蔵文化財係長 石 岡 義 文

主 事 田 澤 淳 逸（調査担当）

” 小 野 貫 之（ ” ）

” 木 村 淳 一（ ” ）

” 児 玉 大 成（ ” ）

” 沼宮内 陽一郎（ ” ）

” 設 楽 政 健（ ” ）

5. 調査指導機関

文化庁

青森県教育長文化課

6. 調査方法

市内全域を対象にし、特に開発が予想される地域を重点的に周知の遺跡の現地踏査を行い、現状を確認し、同時に市内各地の新規遺跡調査の発見を行う。

第 章 調 査 概 要

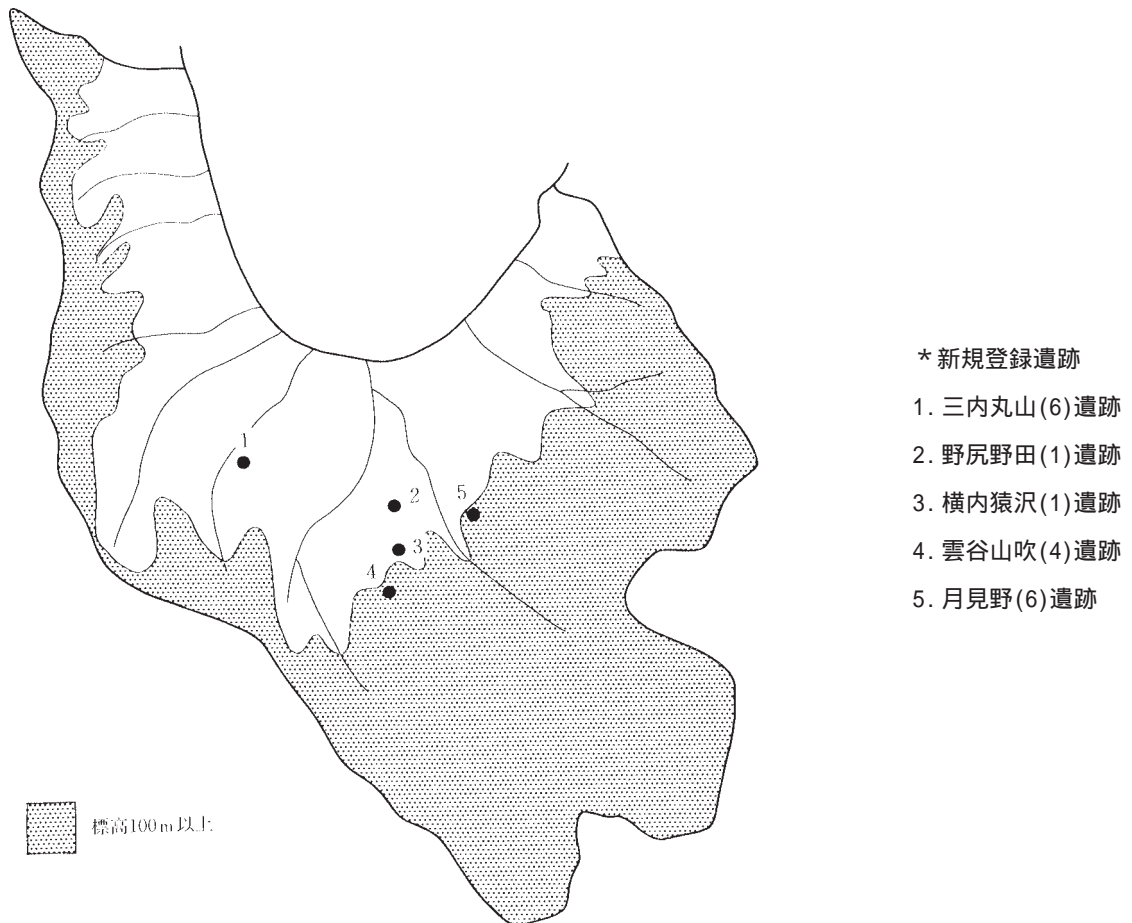
第 1 節 調査地区

調査は5月から12月中旬まで実施した。対象地区は、標高200m以上の山岳地帯と海、河川、市街地を除く市内全域とした。特に、開発が予想される地域に所在する、周知の遺跡とその周辺の重点的な踏査を行い、畑地や露頭など地表面や断面の観察が可能な地点を調査した。また、開発申請のあった地区の現地立ち会いやその周辺調査も実施した。

その結果、新たに次の5遺跡を発見したので所定の手続きをとり、新規登録をした。

新規登録遺跡

- | | |
|-----------|-------------------------------|
| 三 内 地 区 | 三内丸山(6)遺跡 |
| 横内・雲谷地区 | 野尻野田(1)遺跡、横内猿沢(1)遺跡、雲谷山吹(4)遺跡 |
| 月 見 野 地 区 | 月見野(6)遺跡 |



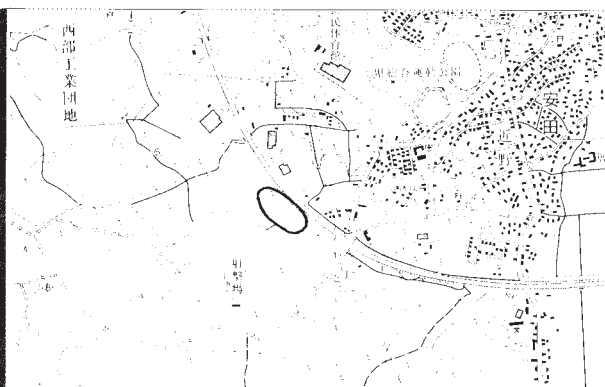
第 1 図 新規登録遺跡位置図

第2節 新規登録遺跡

遺跡名	三内丸山(6)遺跡	立地	丘陵
遺跡番号	01282	現況	山林
所在地	青森市大字三内字丸山	時代	縄文時代中期・後期・平安時代
種別	包蔵地	遺物	縄文土器・石器・土師器



写真1 近景



位置図 1

遺跡名	野尻野田(1)遺跡	立地	平野
遺跡番号	01283	現況	墓地
所在地	青森市大字野尻字野田	時代	平安時代
種別	散布地	遺物	土師器



写真2 近景



位置図 2

遺跡名	横内猿沢(1)遺跡	立地	丘陵
遺跡番号	01284	現況	畑地
所在地	青森市大字横内字猿沢	時代	平安時代
種別	包蔵地	遺物	須恵器

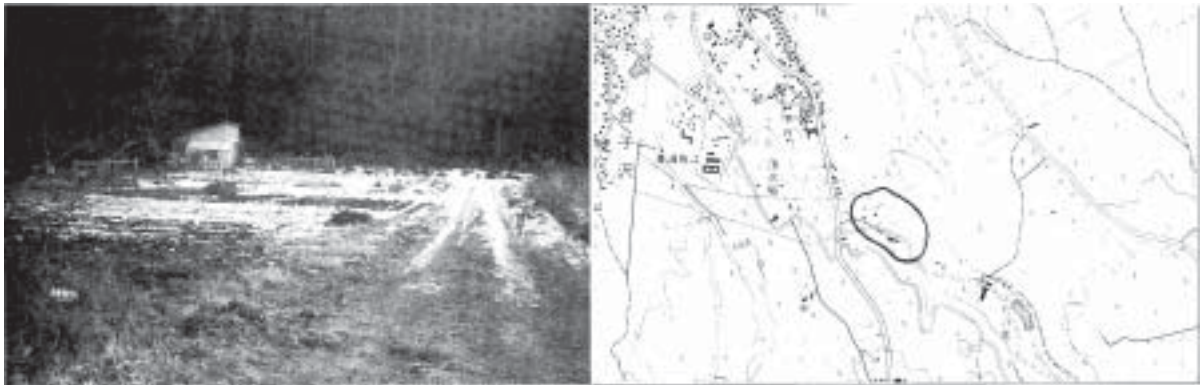


写真3 近景

位置図 3

遺跡名	雲谷山吹(4)遺跡	立地	丘陵
遺跡番号	01285	現況	山林
所在地	青森市大字雲谷字山吹	時代	縄文時代
種別	包蔵地	遺物	縄文土器・石器



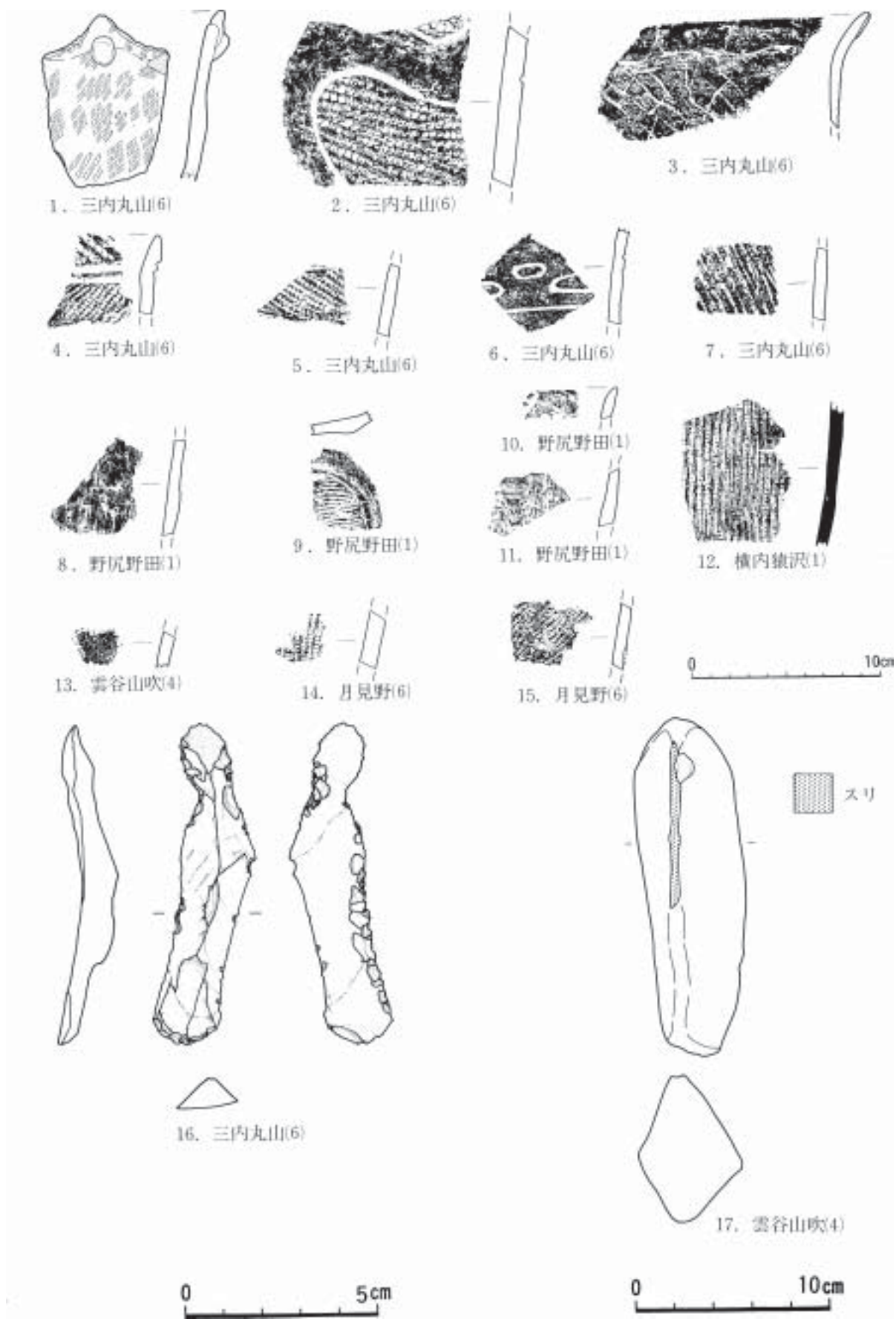
写真4 近景

位置図 4

遺跡名	月見野(6)遺跡	立地	丘陵
遺跡番号	01286	現況	山林
所在地	青森市大字駒込字深沢	時代	縄文時代前期・晩期
種別	包蔵地	遺物	縄文土器



写真5 近景



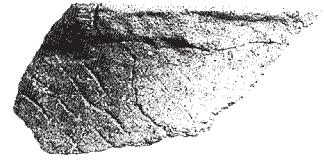
第2図 表面採集資料



1. 三内丸山(6)



2. 三内丸山(6)



3. 三内丸山(6)



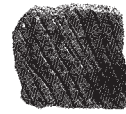
4. 三内丸山(6)



5. 三内丸山(6)



6. 三内丸山(6)



7. 三内丸山(6)



8. 野尻野田(1)



9. 野尻野田(1)



10. 野尻野田(1)



11. 野尻野田(1)



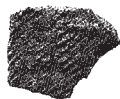
12. 横内猿沢(1)



13. 雲谷山吹(4)



14. 月見野(6)



15. 月見野(6)



16. 三内丸山(6)



17. 雲谷山吹(4)

第 章 八甲田火山性台地上の遺跡について

第 1 節 遺跡付近の地形・地質

青森県教育センター指導主事 工藤 一彌

青森平野は新生代第四紀（約 170 万年前～現在）に形成された海岸平野であり、東西約 10km、南北約 5km のほぼ直角三角形となっている。北は陸奥湾に面し、南は八甲田火山群につらなる火山性の台地、東は東岳を中心とした古い地層の分布する比較的急峻な山地、西は標高 50～150m の比較的緩傾斜の開析が進んだ丘陵に囲まれている。調査地域は地形的・地質的にみて、北部の平野部、南部の八甲田山系、東部の奥羽山脈の延長部の三つに区分される。水系図から、平野部は合流した数本の河川だけが北流し、南部は八甲田火山群を中心とする放射状の水系と、平野に向かって平坦面を北～北東に流れる平行河川、東部は折紙山・堀子岳・檜木森山などを中心とする放射状の水系である。

平野部は標高 15m 以下の平坦地からなり、西の高田付近に荒川の扇状地、東の矢田前付近に野内川の扇状地があり、標高 2～10m は各河川の三角州性の低地、標高 2m 以下の海岸低地は海岸線に平行な砂州とその間の湿地からなっている。それぞれの境界は市街地化や耕地整理によって不鮮明になっている。平野部と西部の丘陵地との境界には「入内断層」と呼ばれる南北方向の大きな断層が存在している。この断層は第四紀洪積世初頭（約 170 万年前）から活動を始め、断層の東側が最大で 800m 以上も北に落ち込み、南方の八甲田火山群などの後背地から運ばれた大量の碎屑物により非常に厚い地層が堆積し、海岸平野が形成されていった。

南～南東側の火山性台地は、八甲田カルデラ（現在の田代平）から噴出した八甲田火砕流堆積物、いわゆる「田代平溶結凝灰岩」で構成されており、八甲田火山群から北方に続いており標高は 40～500m である。八甲田牧場（標高 500m）、雲谷平（200m）、梨の木平（200m）、青森ゴルフ場（150m）、月見野霊園（100m）など緩傾斜の平坦面が広く残っており、傾斜は荒川右岸の青森ゴルフ場付近で約 2.5 度、雲谷付近で約 3 度、四ツ石付近で約 2.2 度、田茂木野付近で約 2.7 度、梨の木付近で約 3.5 度、平均で約 3 度である。この台地を構成する溶結凝灰岩は侵食に弱いため、入内川、荒川、合子沢川、横内川、駒込川など、いずれの河川の谷壁も 25～40 度と他の開析谷に比べて著しく急傾斜となっている。南の遺跡分布地域は平野の南東部に広がるこの火山性台地の北端に立地し、平野部に対し、北～北西側に緩く傾斜した台地上に遺跡が存在している事が多い。この台地は北～北西に流れる数本の河川によって分けられている。入内川、荒川、合子沢川、横内川、駒込川に挟まれた部分は平野に対し舌状に突き出した台地となっており、縄文時代の遺跡は各台地上に大部分が分布する。これは縄文海進によって海水面が現在より約 5m 上昇したため平野部の半分ほどが海面下になっていたことによるものと考えられる。これに対し縄文晩期～中世には海岸線は現在とほぼ同じ位置にあったため、遺跡は沢田・露草など平野部の中や宮田・戸崎館など小丘の上に存在するものもある。

東部の山地は地質構造上、東北地方の脊梁山脈である奥羽山脈の延長部にあたり、新生代新第三紀（約 2500 万年前～約 170 万年前）の火山岩、堆積岩などで構成されており、流水の浸食作用により起伏の大きい地形となっている。遺跡は扇沢・築木館など野内川流域の段丘面や緩傾斜地に存在し、起伏の大きい所にはほとんど存在していない。

西部の丘陵地は開析がすすみ、稜線の標高は 50～150m で緩やかに北に傾斜している。砂・砂質シルト層からなる洪積世の岡町層を基盤に砂・砂礫や八甲田火砕流堆積物などが重なり、最上位に火山灰層

が堆積している。丘陵地と平野の境界部に朝日山・細越・栄山など多数の遺跡が分布している。

本地域の地層は大部分が新生代（約 6500 万年前～現在）の地層で構成されており、先第三系（約 6500 万年以前の地層）は東部の東岳付近と夏泊半島の東岸に部分的に分布している。東岳付近のものは石灰岩、粘板岩、チャートなどの堆積岩と花崗岩からなり時代未詳である。夏泊半島のものは石灰岩、チャートからなり、石灰岩から発見されたコノドントという化石によって中生代三畳紀～ジュラ紀であることが分かった。東岳の先第三系の年代は、夏泊半島と比較的近距離にあることや他地域の花崗岩の年代から中生代であろうと推定されている。

新生代新第三紀の地層は下位から金ヶ沢層・四ツ沢層・和田川層の順に重なっている。金ヶ沢層は主に、変朽安山岩（風化・変質した安山岩）、凝灰岩、凝灰角レキ岩などからなり、全体的に変質が激しく暗緑色～紫色をしている。これらの岩石は新第三紀の海底火山活動によるものであり、野内川上流一帯に分布している。四ツ沢層は金ヶ沢層分布域の周辺や駒込川・荒川の谷底に分布する。安山岩、玄武岩、泥岩、凝灰岩からなる。凝灰岩はグリーンタフと呼ばれ緑色を呈し、流紋岩質～安山岩質である。和田川層は泥岩、凝灰岩からなり、凝灰岩は野内川下流に分布し淡緑色～淡黄色で、凝灰角礫岩や細粒凝灰岩が多い。

新生代第四紀（約 170 万年前～現在）の地層は岡町層と十和田・八甲田火山噴出物に分けられる。岡町層は青森市西部の岡町、新城付近に分布し、砂岩、礫岩、シルト岩などからなり、西部の丘陵地の基盤を構成している。十和田・八甲田火山噴出物は八甲田火山溶岩、八甲田火砕流堆積物、降下火山灰等からなり、溶岩は両輝石安山岩～玄武岩質安山岩で多くの種類に分類されている。

八甲田火砕流堆積物は村岡・長谷（1990）によると、大きく 2 つに区分され、そのうち 1 期のものには水底火砕流堆積物として産する場合があり、従来の鶴ヶ坂層がこれに相当するという。2 期のものは従来の田代平溶結凝灰岩に相当し、陸上火砕流堆積物が主体である。村岡・長谷（1990）は K - Ar 法により八甲田第 1 期火砕流堆積物を約 65 万年前、八甲田第 2 期火砕流堆積物を約 40 万年前の活動としている。八甲田火砕流堆積物は「入内断層」によってできた低地を埋め、緩やかな勾配で北西側に傾斜し、横内～駒込付近から平野に没し、平野部の試錐データによると断層の東側で 1000m、市の中心部では 500m、市東部の矢田前付近では 300m の深さまで達している。田代平付近には植物化石を多産する砂岩、凝灰岩、泥岩の薄互層からなる湖水堆積物があり、これを田代平湖成層といい、火砕流噴出によって生じたカルデラ湖に堆積したものと考えられる。

本地域の火山灰層は沢田（1976）により 3 層に区分され、下位から三内火山灰・大谷火山灰・月見野火山灰と呼ばれている。下位の三内火山灰は中部と最下部に浮石帯をもつ赤褐色粘土質降下火山灰で、中位の大谷火山灰は赤褐色粘土質降下火山灰と茶褐色浮石質降下火山灰よりなり、分布範囲は狭い。上位の月見野火山灰は最も広範囲に分布しており、黄褐色浮石質火山灰からなり、浮石流～火山灰流の部分も多い。

南部にある大部分の遺跡の基盤は遺跡内には露出していないが、周辺の調査から八甲田火砕流堆積物と考えられる。黒色土の下位には広範囲に黄褐色火山灰層が分布しており、これは月見野火山灰と考えられる。桜峯遺跡など比較的標高の高い遺跡では、月見野火山灰の下位に赤褐色の粘土質火山灰が分布しており、これは大谷火山灰と考えられる。最下位の三内火山灰はどこの遺跡でも見つからない。基盤の八甲田火砕流堆積物は、塊状無層理で灰色を特徴とし、赤紫色を帯びる所も多い。径が 1mm 前後の石英や斜長石を多量に含み、軽石や本質レンズは比較的少ないため、風化面では石英などの鉱物粒の多いことが特徴である。八甲田火砕流堆積物の層厚は 50～100m に見積もられており、荒川や駒込川の

中流部などのように下位の第三系は比較的浅いところにあるものと推定されており、青森平野周辺では野内川上流一帯、駒込川中流、雲谷峠付近、荒川中上流には新第三紀中新世中期の地層が分布する。各遺跡の第四系の基盤にも同様の地層が分布しているものと推定できる。上位の火山灰層は、地形の起伏によって厚さが異なり、凸部で薄く、凹部で厚くなっており、最上位の黒色土でも同様の傾向が認められる。

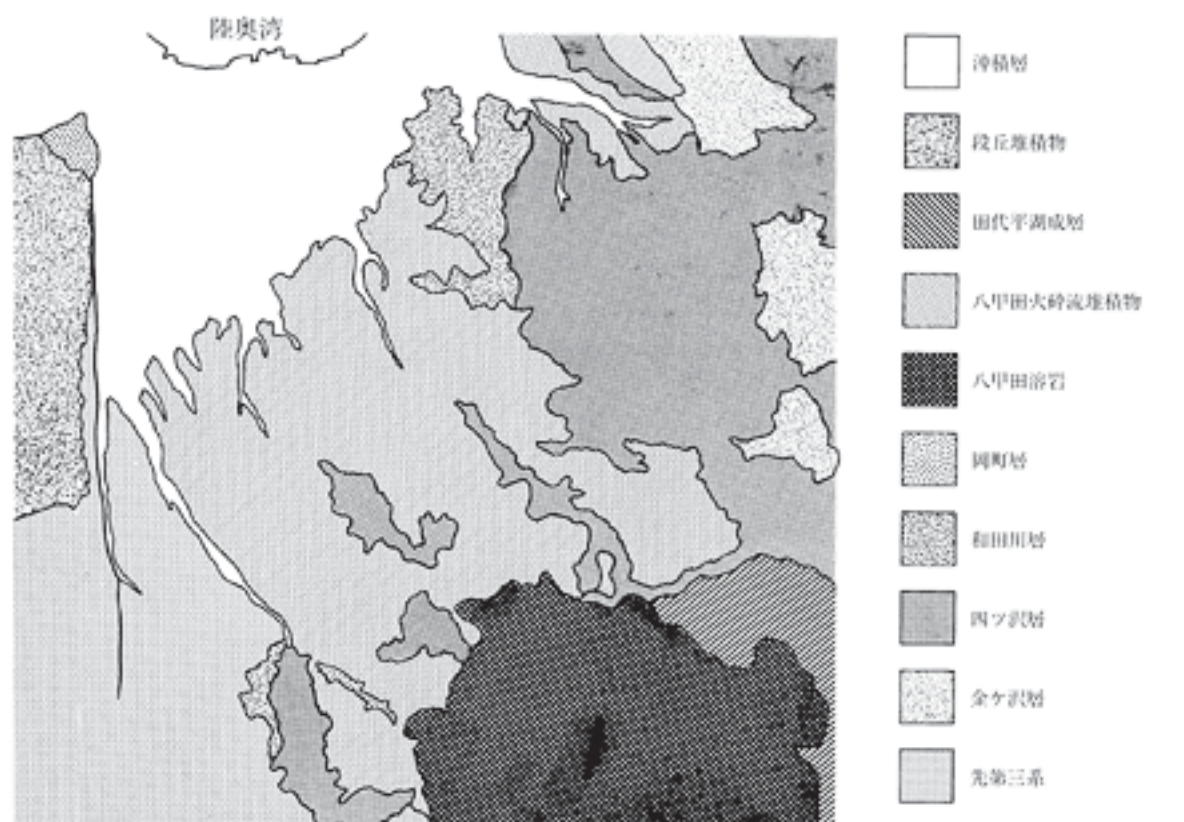
比較的起伏の小さい平坦面は温度・日照・湿度等が生活に適していたため多くの遺跡が存在したものと考えられる。

引用・参考文献

- | | | |
|-----------|------|-----------------------------|
| 北村信他 | 1972 | 青森県の地質（青森県） |
| 沢田庄一郎 | 1976 | 近野遺跡発掘調査報告書（ ）（青森県教育委員会） |
| 沢田庄一郎 | 1976 | 三内丸山（ ）遺跡発掘調査報告書（青森県教育委員会） |
| 沢田庄一郎 | 1978 | 近野遺跡発掘調査報告書（ ）（青森県教育委員会） |
| 池田敬 | 1979 | 青森市の自然（青森市教育委員会） |
| 岩井武彦他 | 1982 | 土地分類基本調査「青森西部」表層地質（青森県） |
| 岩井武彦他 | 1983 | 土地分類基本調査「青森東部」表層地質（青森県） |
| 村岡洋文・高倉伸一 | 1988 | 10万分の1八甲田地熱地域地質図・説明書（地質調査所） |
| 村岡洋文・長谷紘和 | 1990 | 5万分の1地質図幅 黒石地域の地質（地質調査所） |



第3図 水系図



第4図 地質図

(1988. 村岡 1/100,000地熱地域地質図を一部改変)

第2節 八甲田火山性台地上の遺跡について ～ 斜面と風向きからの一考察～

はじめに

青森市内に所在する周知の遺跡は平成8年度の新規登録遺跡を含め286箇所であり、それらの大半は青森平野を囲む丘陵地に所在する傾向がみられる。

青森平野を囲む丘陵地を大きく捉えると、南部から東部に位置する八甲田火砕流堆積物からなる台地、西部は比較的緩傾斜の丘陵地であり、それぞれ北側、西側、東側に向かい傾斜している。

それらの丘陵地は河川や沢によって小丘陵に分けられており、各々の丘陵地上に確認されている遺跡が多い。

当市で平成9年3月現在確認されている周知の遺跡は、縄文時代早期から中世までと幅広く、なかでも縄文時代と平安時代にあたるものが多い。

この青森市には、人々の生活の跡が数多く残されているわけであるが、彼らが生活を営むうえで土地を選定する際には、何らかの条件を念頭に置いていたのは当然のことであったと考えられる。例えば集落であれば、日当たり、風向き、食料が容易に確保できる場所であることなどの条件を考慮に入れていたであろうし、猟場や野営地であれば、獲物の捕獲が容易なように獣道に近い場所であることなどを考えていたであろう。しかし、市内に所在する遺跡は、未調査のものが多く、それぞれの詳しい状況は明らかではない。

そこで本項では、これまで本事業を通し得てきた幾つかの知見を基に、現地踏査を基本とする分布調査の視点から土地の斜面に着目し、そこから当時の人々が土地を選定するうえで、斜面の向きを考慮に入れていたのかどうか推測してみようと試みた。遺跡の立地する斜面が東西南北のいずれの方角に向いているのかを調べ、そこから斜面の向きに何らかのまとまりが表れるのか、また、時代ごとに差異が認められるのかどうかを分析してみたい。

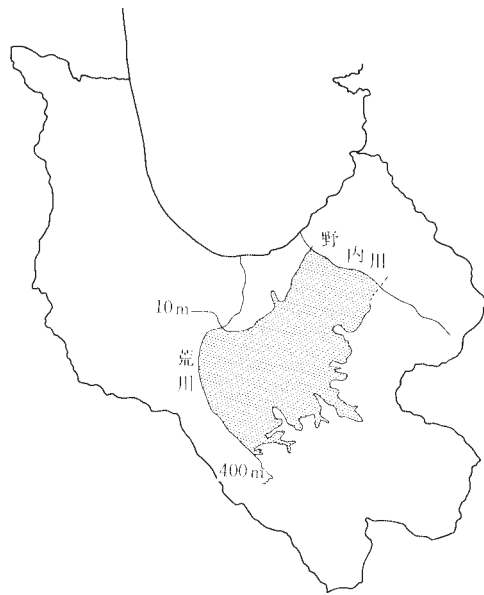
なお、対象とした周知の遺跡は標高10m～400mまでの荒川から野内川にはさまれる地域に所在する遺跡とした。

また、対象とした周知の遺跡には未調査の箇所が多いため集落跡、散布地などの区別をつけなかった。

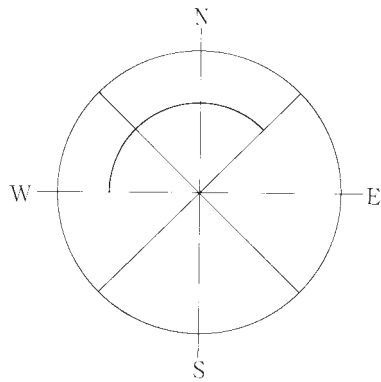
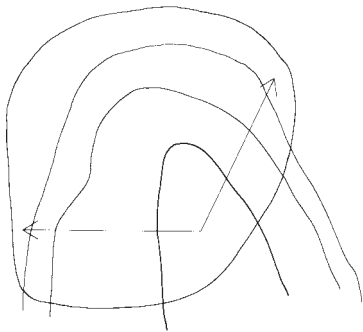
周知の遺跡の現地踏査を基本とし、参考として国土地理院発行の25,000分の1地形図を使用した。

対象となる遺跡のほぼ中心にあたる場所で方位磁針により磁北を求め、地形図と現地を照らし合わせ斜面の向さを判断し、時期ごとに第6図から第9図にまとめた。

丘陵上に位置するものでも平坦な地形上に確認されているものは平坦地に位置するものと判断した。

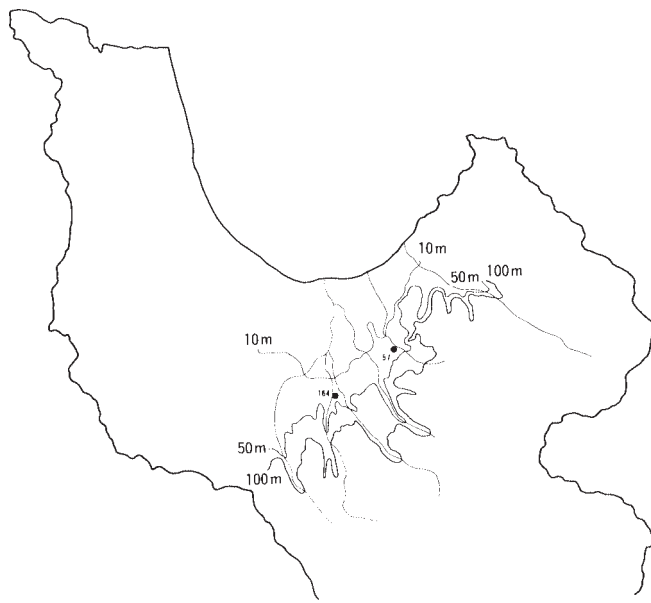


(例) 北東から西に傾く斜面

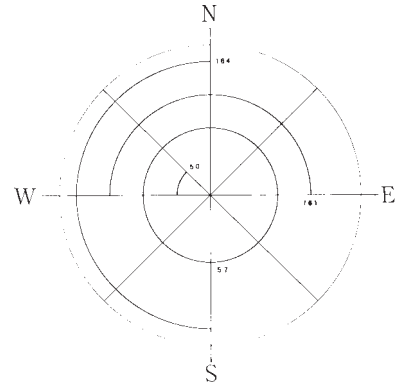


遺跡が所在する斜面がどの方向に傾斜しているのかを表現するために、円を8方向に区切り、円の内部に傾斜の方向を示す円弧を描き、それを時代ごとにまとめた。

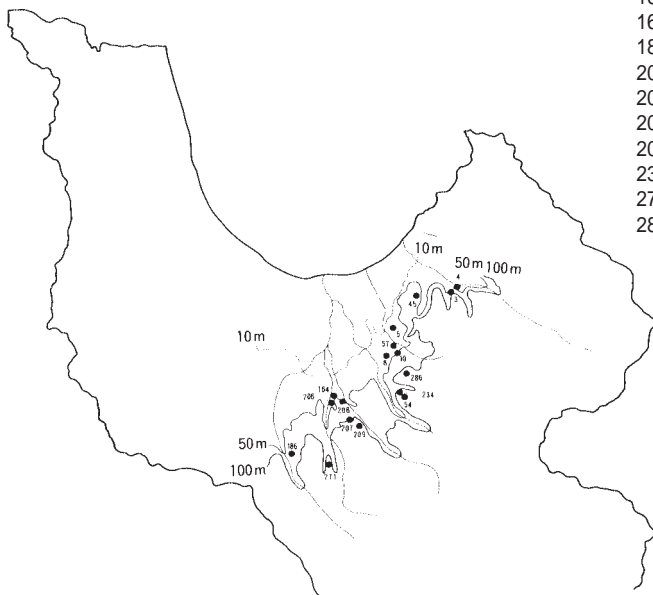
第5図 対象範囲と傾斜表現



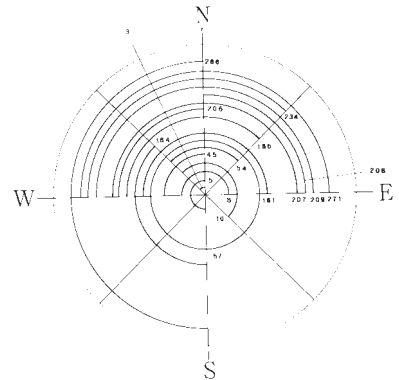
- 縄文時代早期
 050 阿部野遺跡
 057 蛭沢遺跡
 161 新町野遺跡
 164 横内遺跡



縄文時代 早期

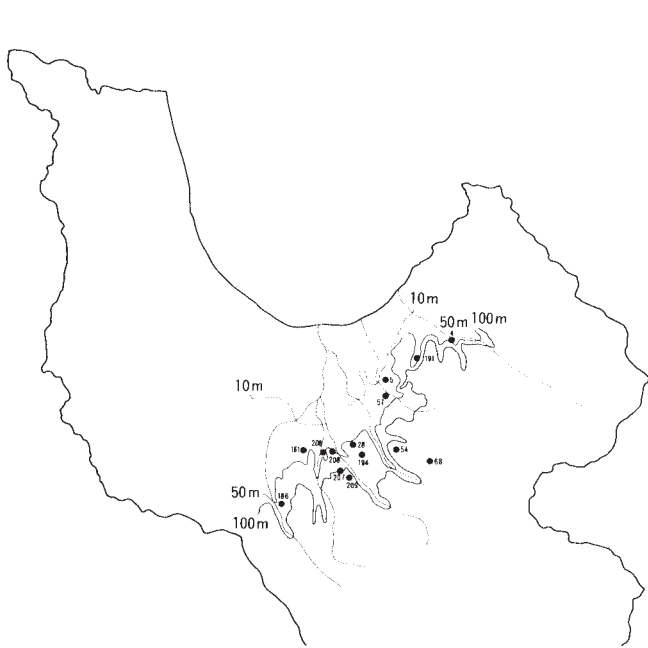


- 縄文時代 前期
 003 築木館岩瀬遺跡
 004 築木館布引遺跡
 005 戸山遺跡
 008 玉清水(3)遺跡
 010 月見野遺跡
 045 稲山遺跡
 054 梨の木平遺跡
 057 蛭沢遺跡
 161 新町野遺跡
 164 横内遺跡
 186 山吹(1)遺跡
 206 横内(2)遺跡
 207 桜峯(1)遺跡
 208 桜峯(2)遺跡
 209 鏡山遺跡
 234 深沢(2)遺跡
 271 山口遺跡
 286 月見野(6)遺跡

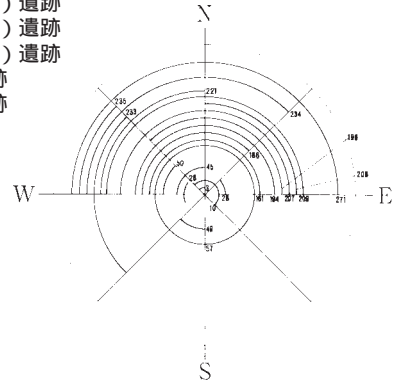


縄文時代 前期

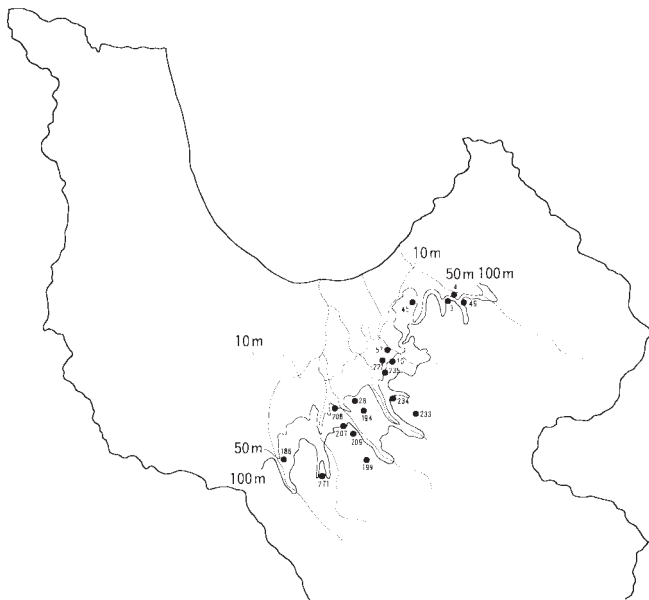
第6図 縄文時代早期・前期



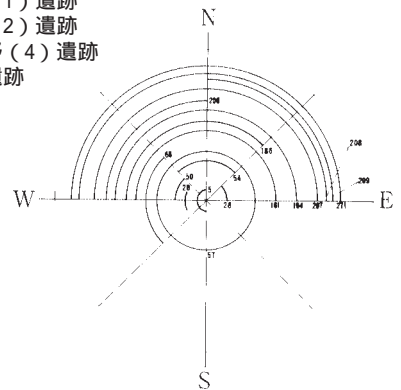
- 縄文時代中期
- 004 築木館布引遺跡
 - 005 戸山遺跡
 - 028 四ツ石遺跡
 - 050 阿部野遺跡
 - 054 梨の木平遺跡
 - 057 蛭沢遺跡
 - 068 梨の木平牧場遺跡
 - 161 新町野遺跡
 - 186 山吹(1)遺跡
 - 191 牛蒡畑遺跡
 - 194 四ツ石(2)遺跡
 - 206 構内(2)遺跡
 - 207 桜峯(1)遺跡
 - 208 桜峯(2)遺跡
 - 209 鏡山遺跡
 - 271 山口遺跡



縄文時代 中期



- 縄文時代 後期
- 003 築木館岩瀬遺跡
 - 004 築木館布引遺跡
 - 010 月見野遺跡
 - 028 四ツ石遺跡
 - 045 稲山遺跡
 - 049 山の井遺跡
 - 050 阿部野遺跡
 - 057 蛭沢遺跡
 - 161 新町野遺跡
 - 186 山吹(1)遺跡
 - 194 四ツ石(2)遺跡
 - 199 雲谷山吹(1)遺跡
 - 207 桜峯(1)遺跡
 - 208 桜峯(2)遺跡
 - 209 鏡山遺跡
 - 221 月見野(3)遺跡
 - 233 深沢(1)遺跡
 - 234 深沢(2)遺跡
 - 235 月見野(4)遺跡
 - 271 山口遺跡



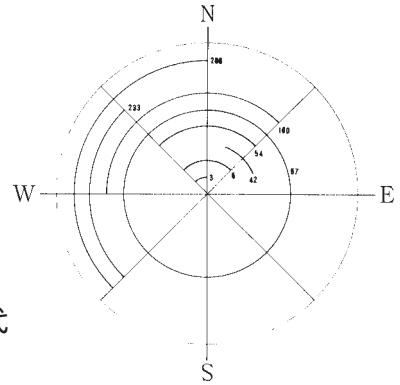
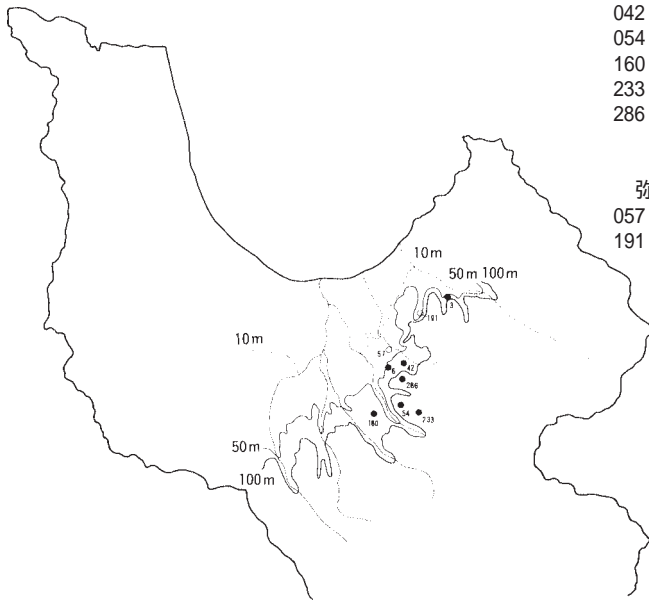
縄文時代 後期

第7図 縄文時代中期・後期

- 縄文時代 晩期
- 003 築木館岩瀬遺跡
 - 006 玉清水(1)遺跡
 - 042 沢山(1)遺跡
 - 054 梨の木平遺跡
 - 160 田茂木野遺跡
 - 233 深沢(1)遺跡
 - 286 月見野(6)遺跡

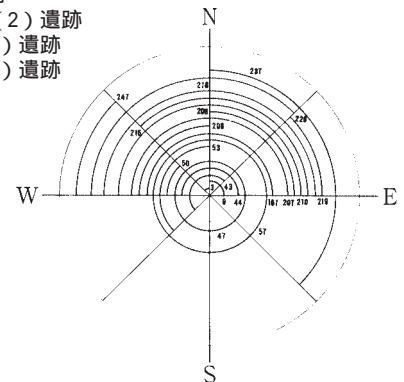
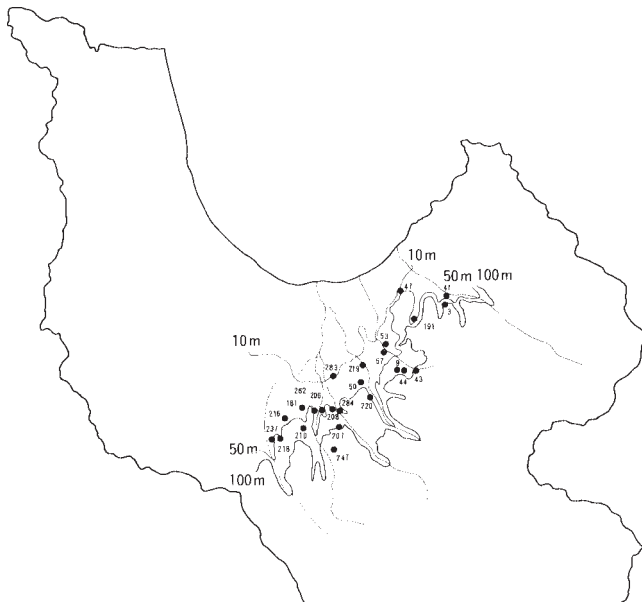
- 弥生時代
- 057 蚩沢遺跡
 - 191 牛蒡畑遺跡

・縄文時代
○弥生時代



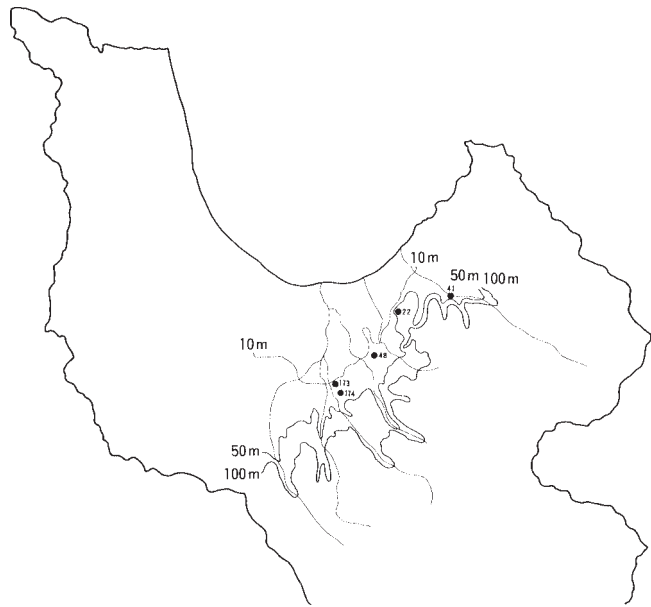
縄文時代晩期・弥生時代

- 平安時代
- 003 築木館岩瀬遺跡
 - 009 月見野壘園遺跡
 - 041 築木館遺跡
 - 043 沢山(2)遺跡
 - 044 沢山(3)遺跡
 - 047 後沓遺跡
 - 050 阿部野遺跡
 - 053 赤坂遺跡
 - 057 蚩沢遺跡
 - 161 新町野道跡
 - 191 牛蒡畑遺跡
 - 206 横内(2)遺跡
 - 207 桜峯(1)遺跡
 - 208 桜峯(2)遺跡
 - 210 野木遺跡
 - 216 野木沢田遺跡
 - 218 葛野(2)遺跡
 - 219 阿部野(2)遺跡
 - 220 阿部野(3)遺跡
 - 237 山吹(4)遺跡
 - 247 雲谷山崎遺跡
 - 262 合子沢松森(2)遺跡
 - 283 野尻野田(1)遺跡
 - 284 横内猿沢(1)遺跡

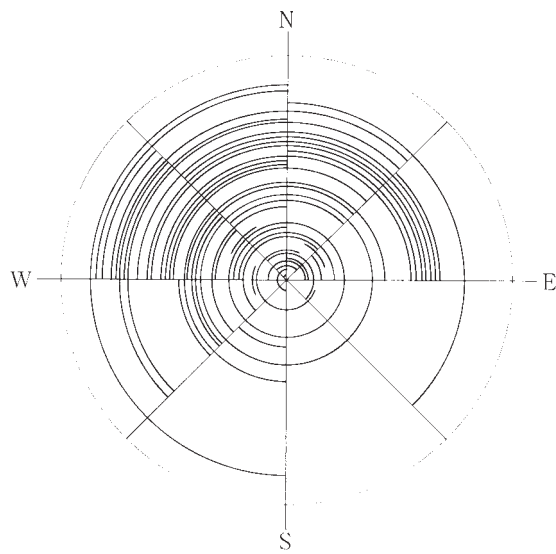
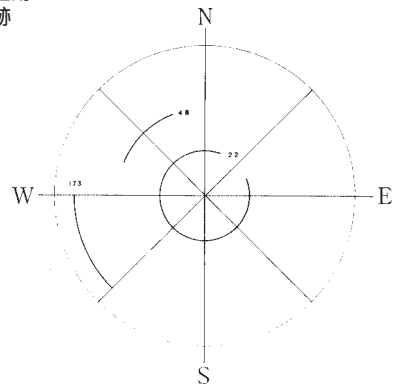


平安時代

第8図 縄文時代晩期・弥生時代・平安時代



館・城跡



第9図 館・城跡・対象全遺跡

遺跡の向き

対象 49 遺跡の所在する斜面方向を分析した結果次のような傾向を読み取ることができた。

1. 主に南側斜面に向かって所在する遺跡は青森市築木館の 01049：山の井遺跡のみであった。
2. 第6～9図より主に北方向にのみ面していると判断できるのは、01006：玉清水(1)遺跡、01054：梨の木平遺跡である。
3. 遺跡の面している方向で最も多い方向は東(北東)～北～西(北西)に面した主に北方向に向く遺跡で 21 遺跡が該当する。(第2項と本項に該当するものを一括して以下 N 型とする。)
4. 第3項に該当する遺跡を除き、南北線を境として、主に東方向に向く遺跡(南北線から西側には向かない遺跡、以下 E 型とする。)は 6 遺跡、逆に主に西方向に向く遺跡(以下 W 型とする。)は 16 遺跡で、構成比は約 1：3 である。
5. 平坦な土地、丘陵上にあっても傾斜が殆ど感じられない平坦地に所在する遺跡は 7 遺跡であった。

1については鍵取山、神堤山、檜木森山などの裾野に囲まれた、標高 60～100m に所在する遺跡である。対象とした遺跡の中で唯一、南側を向く特異な存在である。

2の梨の木平遺跡は駒込川本流と枝沢に挟まれた丘陵上に所在する遺跡である。駒込川との比高差は約 110m、枝沢との比高差は約 10m である。

3の分析結果については、北西に向かって傾斜するという対象地域の地形から判断すると調査当初からある程度推測できた結果である。

4の構成比についてであるが、1：3の構成比は時期・時代の区分をしない遺跡別の構成比であり、これをさらに時期・時代別に分けてそれぞれの時期の構成比を第1表に表した。

	縄文早期	縄文前期	縄文中期	縄文後期	縄文晩期	弥	生	平	安	館	城跡
E 型	0	1	2	2	1	0	4	0			
W 型	2	5	4	8	3	0	5	2			
構成比	0:2	1:5	1:2	1:4	1:3		4:5	0:2			

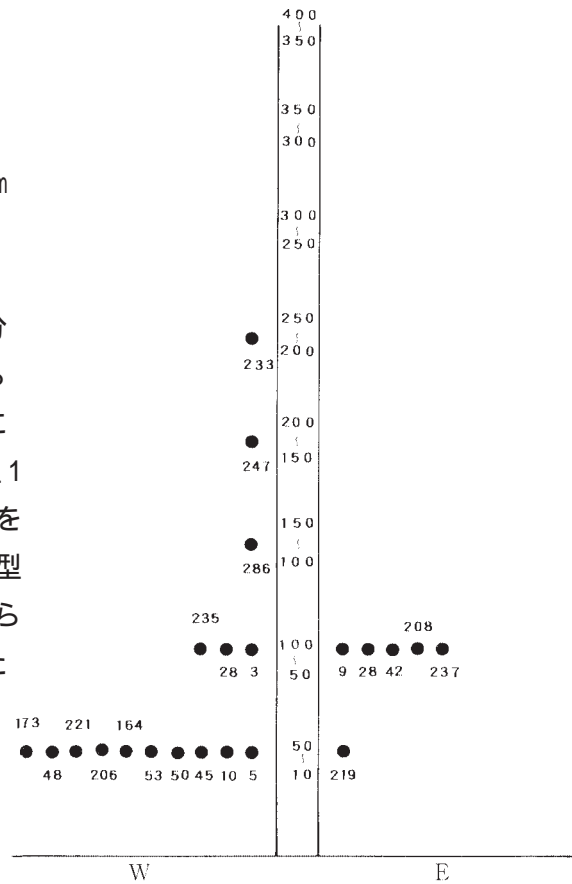
第1表 時代別構成比

第1表から読み取れるように、縄文時代早期から縄文時代晩期にかけ共通して W 型遺跡が多い。平安時代になると、W 型遺跡は多いもののその数はほぼ同数である。さらに、W 型遺跡が多いという傾向が標高の変化による影響を受けているのかを探るため、該当する 22 遺跡の標高別分布図を作成した。遺跡の範囲には比高差があり、高さが一様ではないため対象地域の標高を 50m 毎に区切り、それぞれの遺跡

のほぼ中心部を基準として作成した。

第10図より該当22遺跡の標高別分布は、標高10～50mの沖積地付近から八甲田山裾野の低丘陵上に分布する遺跡、標高50～100mに分布する遺跡、標高100m以上に分布する遺跡の3パターンに大別できよう。これらを時期別に細分したものが第11図である。

縄文時代から平安時代までを通して10～50mに分布する遺跡はW型遺跡が多いという傾向に変化はみられないが、50～100mに分布する遺跡ではその傾向に変化がみられた。前期・晩期ではW型1遺跡：E型1遺跡、後期ではW型2遺跡：E型3遺跡とほぼ同率を示し、中期・平安時代にいたってはW型2遺跡：E型1遺跡、W型3遺跡：E型1遺跡と傾向の逆転がみられる。50～100mに分布する遺跡は遺跡数が少ないため、傾向の変化が正しいものかは断言が難しいところであり、今後の当該地域の新発見遺跡の増加によりどのような変化がみられるのが注目していきたいが、10～50mに分布する遺跡と異なる傾向をみせたのは興味深いところである。



第10図 標高別遺跡分布図

風向きと斜面の関係について

これまでの分析結果からN型の遺跡が最も多く、次いでE型・W型というような状況であった。E型とW型は10～50mに分布する遺跡にはE型<W型の傾向がみられるが、50～100mに分布する遺跡はそれと異なる傾向がみられることが明らかとなった。

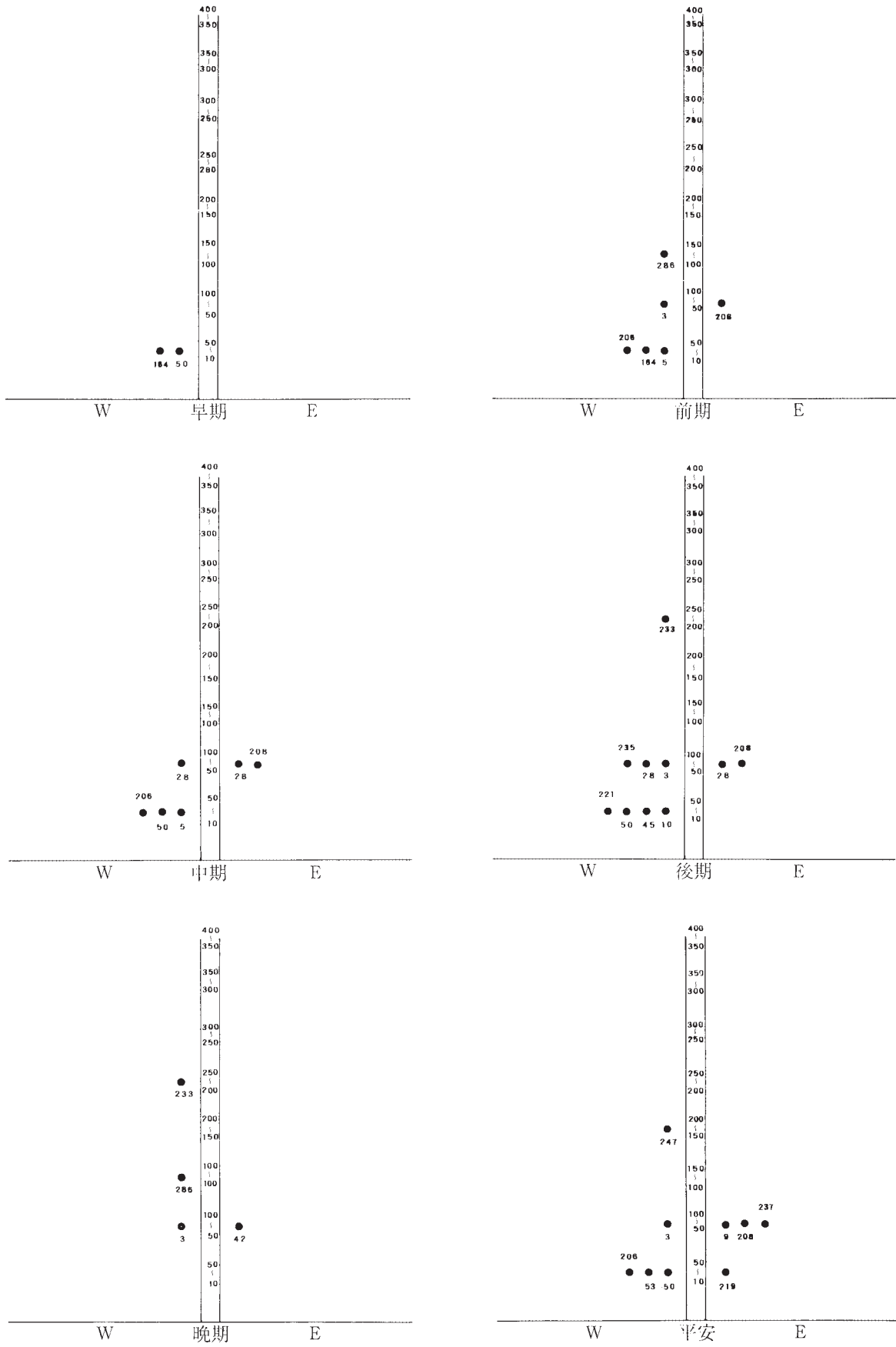
それでは、なぜ北向きの本地域を選定しこの地を利用して生活していたのかを、気圧の移動に伴う風向きに着目し斜面の向きとの関係を考えてみたい。

		1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	全年
最多風向・頻度(%)		SW26	SW22	SW18	SW14	SW12	N11	ENE13	ENE12	SSW12	SW17	SW20	SW24	SW16
階級別 日数	10.0m/s	1.6	0.9	2.3	2.8	1.6	0.1	0.1	0.5	0.4	1.5	1.8	1.4	14.9
	15.0m/s			0.1	0.1				0.1	0.1	0.1			0.4
	20.0m/s													
	30.0m/s													
風速(m/s)		3.4	3.2	3.1	3	2.9	2.3	2.1	2.2	2.2	2.6	2.9	3	2.8

青森

第2表 平年値 1961～1990

(気象庁「日本気候表」平年値(1961～1990)をもとに作成)



第 11 図 標高別遺跡分布図

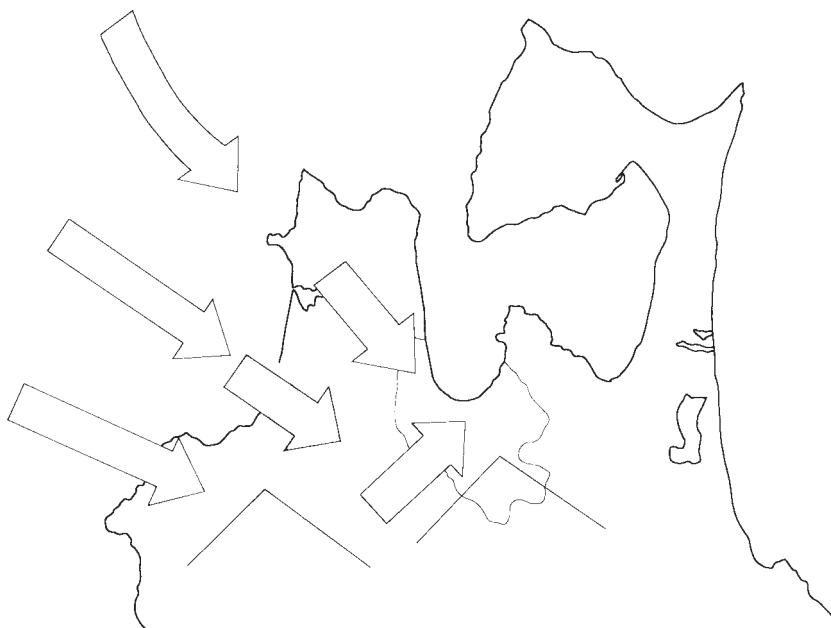
青森地方気象台が所在する、現在の青森市花園における風向は1月から5月までと、9月から12月までは南西の風が多く、夏場の7月と8月は、通称「ヤマセ」と呼ばれる偏東風が吹き易く、6月は北の風が吹くことが多い。年間を通しての最多風向は南西の風である。青森県は、基本的に西よりの風を受けるのであるが、この西よりの風が岩木山と八甲田山の地形の影響によって、青森市には南西の風が吹き易いことが予想される。

対象とした八甲田火山性台地が受ける風の影響を考えると、夏は青森市東部にある東岳をはじめとした山々に東北東の風が遮られヤマセの影響を弱め、また冬は、北西風と南西風の収束場となるらしく青森市は、他地域に比べ積雪量は多い。

河川沿いに吹く風は平野部より強く吹き抜け、河川に沿った斜面は風当たりが強くなる。また、対象とした地域のうち北端部は風向き・風速とも平野部との差はない。

今回の調査では、主に北側を向く斜面に所在する遺跡が多かったが、北側斜面はどのような風の影響を受けるのだろうか。5,000年前と現在の気候を同じであったと仮定すると、年間を通じ南西の風を受け易いが、夏は比較的風の流れは穏やかである。冬には西よりの風や、陸奥湾から吹き上げる冷風の影響を受ける。丘陵の尾根にあたる所では、西よりの風も吹きつけることになり風向きだけに着目するならば、冬は条件はあまり良くないと思われる。西側斜面は西よりの風の影響を受け易く、春から秋にかけて吹く風はおだやかな風であるが、冬は冷たい風となる。また、この季節は年間を通じ最も強い風が吹く時期でもあり、冬の環境は北側斜面と同様厳しいことが予想されよう。東側斜面であるが、青森県には太平洋側からヤマセが吹きつけるがその吹く期間は1年のうち僅か2カ月でありしかも本地域東側に連なる山々に遮られヤマセの影響はそれほど強くは受けないと思われ、川に沿って吹く風さえなければ東側斜面は風の影響を受けにくい斜面である。

本地域内の3方向の斜面のうち、東側斜面が最も風の影響を受けにくいものと思われる。現在と各々



第12図 風向の模式図

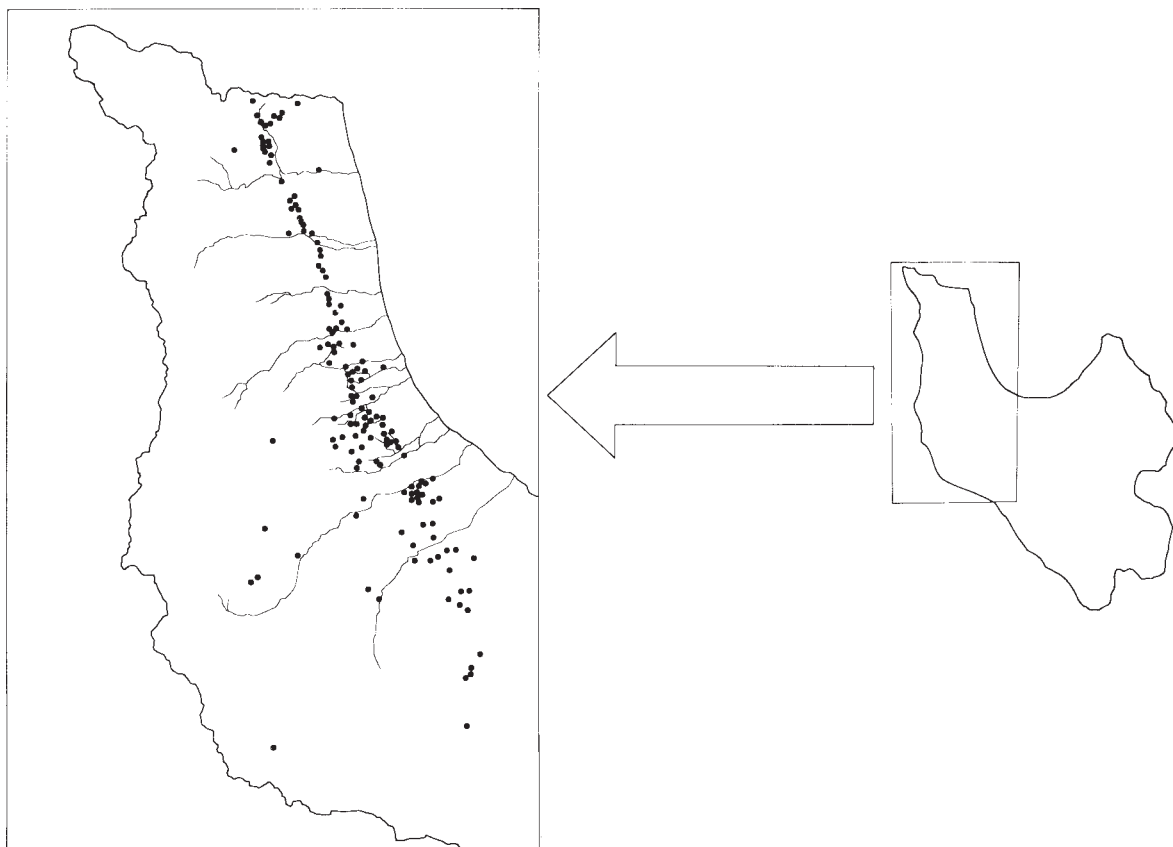
の遺跡が利用されていた時代の気象状況に大きな変化がないのであれば、東側に面した土地が過ごしやすかったことであろう。

しかし今回八甲田火山性台地上に所在する遺跡の斜面の向きを調べた結果、北側に面した斜面に遺跡が所在する場合が最も多く、次いで西側斜面、東側斜面というような状況であり、必ずしも風の影響を受けにくい東側斜面に遺跡が多く所在するというわけではなかった。したがって当時の人々が土地を選定するにあたり、風向きという条件から推測する限りでは、斜面が受ける風の影響はそれほど重要な要素ではなかったと考えられる。

おわりに

分析対象地域とした八甲田火山性台地は、緩傾斜の平坦面をもつ丘陵によって構成されており、遺跡はこれらの緩傾斜の丘陵地上に所在するものが多い。各時代の人々がこのような場所を選定する際にはこの土地でなければならないという何かしらの理由があったものと考えられる。現代に生きる我々が居住地を選定する場合を考えると、土地の価格の問題を除けば、勤務先に近いこと、交通の便がよいこと、学校が近いことなどが条件として上げられ、これらに、さらに付帯する条件として、周辺の環境が良いこと、眺望、日当たりなどもあげられよう。

先の3条件は現代人である我々が考える土地選定条件であって、縄文時代から平安時代にかけて、当該地域で生活を営んだ人々の土地選定条件とは、合致しないとも思われる。付帯した条件については、特に土地に関係の深い事項であり、地形そのものが現代と大差は無いものと考えられ、特に周辺環境などは、容易に食料や水の入手が可能か否かが土地選定条件で大きな比重を占めていたと推察される。



第13図 遺跡分布図（後潟～高田）

今回対象とした八甲田火山性台地を利用した人々は風の影響をそれほど考えていなかったという可能性があるが、青森市全体を大きく捉えてみると、今回の分析結果とは異なるが非常に興味深い遺跡の分布がみえてくる。

青森市は三方を山に囲まれており、それぞれの丘陵は東、北、西に面した斜面となっている。東側に面した後潟から高田にかけての丘陵地、北側に面した今回の分析対象とした台地、西側に面した野内川から浅虫にかけての地域である。三つの地域の中で最も多く遺跡が確認されているのが後潟から高田にかけての丘陵地の縁辺部で194箇所の遺跡が所在する。それに比べ、北側に面した台地と西側に面した地域に所在する遺跡の数は64箇所と24箇所であり、東側に面した丘陵地に所在する遺跡が圧倒的に多く縁辺部に沿って帯状に連続的な分布をみせている。この地域は遺跡の背後の山々により西よりの冷風を避けることができる。夏のヤマセと、背後の山々により日が沈むのが早いことを受け入れるならば、この辺りは本市のなかでは過ごしやすい地域であったと考えられる。また、縄文海進期には海岸線は現在よりも内陸部に入り込んでいたと考えられており、海と山に近く生活の糧を得るには大変都合の良い場所であったであろう。

しかし、現段階ではそれらを推察できるような資料等は見当たらないため、青森市全域を視野にいれて、それぞれの地域間の関係を踏まえつつ今後の発掘調査成果に期待するところである。

(沼宮内 陽一郎・設楽政健)

縄文時代 早期	縄文時代 中期	235 月見野(4)遺跡 271 山口遺跡	平 安 時 代
050 阿部野遺跡 057 蛭沢遺跡 161 新町野遺跡 164 横内遺跡	004 築木館布引遺跡 005 戸山遺跡 028 四ッ石遺跡 050 阿部野遺跡 054 梨の木平遺跡 057 蛭沢遺跡 068 梨の木平牧場遺跡 161 新町野遺跡 186 山吹(1)遺跡 191 牛蒡畑遺跡 194 四ッ石(2)遺跡 206 横内(2)遺跡 207 桜峯(1)遺跡 208 桜峯(2)遺跡 209 鏡山遺跡 271 山口遺跡	縄文時代 晩期 003 築本館岩瀬遺跡 006 玉清水(1)遺跡 042 沢山(1)遺跡 054 梨の木平遺跡 160 田茂木野遺跡 233 深沢(1)遺跡 286 月見野(6)遺跡	003 築木館岩瀬遺跡 009 月見野霊園遺跡 041 築木館遺跡 043 沢山(2)遺跡 044 沢山(3)遺跡 047 後菴遺跡 050 阿部野遺跡 053 赤坂遺跡 057 蛭沢遺跡 161 新町野遺跡 191 牛蒡畑遺跡 206 横内(2)遺跡 207 桜峯(1)遺跡 208 桜峯(2)遺跡 210 野木遺跡 216 野木沢田遺跡 218 葛野(2)遺跡 219 阿部野(2)遺跡 220 阿部野(3)遺跡 237 山吹(4)遺跡 247 雲谷山崎遺跡 262 合子沢松森(2)遺跡 283 野尻野田(1)遺跡 284 横内猿沢(1)遺跡
縄文時代 前期			
003 築木館岩瀬遺跡 004 築木館布引遺跡 005 戸山遺跡 008 玉清水(3)遺跡 010 月見野遺跡 045 稲山遺跡 054 梨の木平遺跡 057 蛭沢遺跡 161 新町野遺跡 164 横内遺跡 186 山吹(1)遺跡 206 横内(2)遺跡 207 桜峯(1)遺跡 208 桜峯(2)遺跡 209 鏡山遺跡 234 深沢(2)遺跡 271 山口遺跡 286 月見野(6)遺跡	縄文時代 後期 003 築木館岩瀬遺跡 004 築木館布引遺跡 010 月見野遺跡 028 四ッ石遺跡 045 稲山遺跡 049 山の井遺跡 050 阿部野遺跡 057 蛭沢遺跡 161 新町野遺跡 186 山吹(1)遺跡 194 四ッ石(2)遺跡 199 雲谷山吹(1)遺跡 207 桜峯(1)遺跡 208 桜峯(2)遺跡 209 鏡山遺跡 221 月見野(3)遺跡 233 深沢(1)遺跡 234 深沢(2)遺跡	弥 生 時 代 057 蛭沢遺跡 191 牛蒡畑遺跡	館 ・ 城 跡 022 戸崎館遺跡 041 築木館遺跡 048 駒込館遺跡 173 野尻館遺跡 174 横内城跡

第3表 対象遺跡時代別一覧表

ま と め

吉野ヶ里遺跡や三内丸山遺跡に端を発した埋蔵文化財に対する関心が年々高くなってきており、同時に埋蔵文化財の存在が青森市民にとってより身近になりつつあるなか、当委員会では今年度も本事業を実施いたしました。

調査の結果、5箇所の新規遺跡の発見があり、平成9年3月現在、本市に所在する周知の遺跡は286箇所を数えております。

新規登録遺跡は年を追うごとに増加しておりますが、それと比例するように本市における各種開発事業もまた増加しております。

今年度も国道103号道路改良工事に先立った桜峯(1)遺跡や、県営高田地区農免農道整備事業に係わる葛野(2)遺跡の発掘調査などが行われ、失われゆく遺跡を記録保存という形で後世に殉すことができました。これらの発掘調査は、これまで本事業が継続して行われ、新規登録遺跡の発見と遺跡台帳の整備充実を積極的に進めてきた成果ですが、遺跡の発見が地表面の観察に頼るところが大きいことを考えると、まだ相当数の遺跡が地下に埋もれていることが推察されます。

このような未発見の遺跡が人知れず失われる可能性のあることや、河川の浸蝕などによる遺跡の自然破壊の恐れを考えると、周知の遺跡の現状把握は当然のことながら、未発見の遺跡の早期発見、数力年にわたる検討事項であります周知の遺跡の統合・拡大・縮小など、取り組むべき課題に向いこれからも、今まで以上の努力をばらわなければならないことを痛感しています。

遺跡の保護を第一と考え、次代へ正しく継承することと、豊かで快適な環境を築くための各種開発事業という、一見相いれない両者の円滑な調整を図ることは、私共の責務であると担当者一同心得ております。そのためにも、埋蔵文化財保護を広く訴え、関係各機関等との連携をより積極的に進め、また、開発予定地の早期把握を心掛け、常に正確かつ最新の情報を整備かつ提供していくためにも、本事業はこれからも継続していきたいと考えております。

今回の分布調査と本書の刊行にあたり、現地踏査においては、本事業の主旨をご理解いただき、調査をご了解いただいた土地所有者の方々に感謝の意を表しますと共に本書が埋蔵文化財保護行政の一助となることを願う次第であります。

(担当者一同)

報告書抄録

ふりがな	し ない い せき しょう さい ぶん ぶ ちょう さ ほう こく しょ							
書名	市内遺跡詳細分布調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	青森市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第31集							
編著者名	沼宮内 陽一郎 設 楽 政 健							
編集機関	青森市教育委員会							
所在地	〒030 青森県青森市中央一丁目22 - 5 TEL0177 - 34 - 1111							
発行年月日	西暦 1997年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
し ない い せき 市内遺跡	あ おも ん 青森県 あ おも し ない 青森市内	02201	-	-	-	19960501 ~ 19970331	-	-
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
市内遺跡		縄文時代 ~ 平安			縄文土器 土師器 須恵器			

既刊埋蔵文化財関係報告書一覧

青森市の文化財	1	1962 『三内霊園遺跡調査概報』
〃	2	1965 『四ッ石遺跡調査概報』
〃	3	1967 『玉清水遺跡調査概報』
〃	4	1970 『三内丸山遺跡調査概報』
〃	5	1971 『野木和遺跡調査報告書』
〃	6	1971 『玉清水 遺跡発掘調査報告書』
〃	7	1971 『大浦遺跡調査報告書』
〃	8	1973 『孫内遺跡発掘調査報告書』
		1979 『螢沢遺跡』
		1983 『四戸橋遺跡調査報告書』
青森市の埋蔵文化財		1983 『山野峠遺跡』
〃		1985 『長森遺跡発掘調査報告書』
〃		1986 『田茂木野遺跡発掘調査報告書』
〃		1986 『横内城遺跡発掘調査報告書』
〃		1988 『三内丸山 遺跡発掘調査報告書』
青森市埋蔵文化財調査報告書第16集		1991 『山吹(1)遺跡発掘調査報告書』
〃	第17集	1992 『埋蔵文化財出土遺物調査報告書』
〃	第18集	1993 『三内丸山(2)遺跡発掘調査概報』
〃	第19集	1993 『市内遺跡発掘調査報告書』
〃	第20集	1994 『小牧野遺跡発掘調査概報』
〃	第21集	1994 『市内遺跡詳細分布調査報告書』
〃	第22集	1994 『小三内遺跡発掘調査報告書』
〃	第23集	1994 『三内丸山(2)遺跡・小三内遺跡発掘調査報告書』
〃	第24集	1995 『横内遺跡・横内(2)遺跡発掘調査報告書』
〃	第25集	1995 『市内遺跡詳細分布調査報告書』
〃	第26集	1995 『桜峯(2)遺跡発掘調査報告書』
〃	第27集	1996 『桜峯(1)遺跡発掘調査概報』
〃	第28集	1996 『三内丸山(2)遺跡発掘調査報告書』
〃	第29集	1996 『市内遺跡詳細分布調査報告書』
〃	第30集	1996 『小牧野遺跡発掘調査報告書』
〃	第31集	1997 『市内遺跡詳細分布調査報告書』
〃	第32集	1997 『桜峯(1)遺跡発掘調査概報』
〃	第33集	1997 『新町野遺跡試掘調査報告書』
〃	第34集	1997 『葛野(2)遺跡発掘調査報告書』
〃	第35集	1997 『小牧野遺跡発掘調査報告書』

青森市埋蔵文化財調査報告書第31集

市内遺跡詳細分布調査報告書

発行年月日 平成 9 年 3 月 31 日

発行 青森市教育委員会

〒030 青森市中央一丁目22 - 5

TEL 0177 - 34 - 1111

印刷 東北印刷工業株式会社

〒030 青森市合浦一丁目2 - 12

TEL 0177 - 42 - 2221
